

量の文明から質の文化へ

—21世紀は「いのち」中心の時代—

生命エネルギー研究所所長

杉原 俊雄

【産業の主角は生活産業】

人間は太古から、頭（主に左脳）を使って文明を築き、大いに繁栄してきました。しかし現在、地球を取り巻く自然環境は、今までの人間の知識や経験の枠を超える大きな変化を起し、人間社会に影響を及ぼしています。

そのため、医療、福祉、教育、国土計画などの、国が中心になって進めてきた事業は、成果がなかなか上がりませんでした。

自然や社会環境がかってない状態にある今日、人間の生活を支える産業に求められる方向性は、「いのち」と生活に密着した、精神性や健康状態を高める質の高い生活を追及することです。

二十一世紀は、もはや鉄や石油、原子力の時代ではなく、人々の生活そのものが産業になる時代です。つまり、産業の様相が「売る、作る、教える」側が主角の能動的産業から、「買う、使う、学ぶ」側が主角の受動的産業に様変わりしていくのです。この受動的産業こそが、いわゆる「生活産業」の本質です。

生活産業には、それを支える左右の両輪があります。

ひとつは経営者です。今までは、責任感希薄な、オーナー型ではない社長がトップの企業や、上場会社に見られる護送船団方式の企業が産業界の主流でした。

（護送船団方式は、国が行政指導で業界企業の活動を規制する方式。企業は経営の自由を制限される一方、責任の追及を避けられるため、企業にとって都合の良い方式）

しかしこれからは、オーナー型、あるいは地域型の経営者が産業界を主導

し、強力なリーダーシップを発揮することが切実に求められます。

生活産業を支えるもうひとつの車輪は、生活者です。生活者とは、おおざっぱにいうと次のような意味になります。

「誰にでも公と私の二つの立場がある。職場などを離れた私的な立場の時、人間はその人本来の一個の人格に戻る。公的立場ではなく、そうした個人それぞれの人格が生活者と表現されている」

それで、生活産業を支える車輪としての生活者ですが、生活者はもっと自立し、主体性を持つべきです。今までの生活者は依存型で、マスコミや行政、大企業からの情報を鵜呑みにする一方でした。そして騙され、苦勞して生きてきたのが、労働者などの一般的生活者の歴史だったのです。

しかし、そうした状態がこれ以上続くと、人間の健全な存続が脅かされる時代になってきました。権力組織や大企業ではなく、社会の土台である生活者が主体になるべき時期が到来しています。

生活者が主体になれば、世の中がもっと良くなるだろうと、多くの人々が感じています。ただし、その生活者中心の時代が実現する可能性については、生活者の九十%以上が否定的に考えています。

世の中を本気で変えようと思っている人は、明治維新の時と同じように数パーセントに過ぎないようです。

しかしこれからは、生活者が、生活産業とそれに基づく社会の柱になっていくことは間違いありません。

生活産業の左の車輪が地域の経営者

やグループリーダーで、生活者中心の時代を牽引するまだ数少ない質の高い生活者のリーダーが、右の車輪なのです。

生活者のリーダーとは、健全な生活の知恵を身につけ、そのノウハウを生活相談に応じて提供し、適切なカウンセリングやアドバイスをする能力を備えた人です。そうしたソリューション（問題解決）能力を持った生活者のリーダーが、新しい時代を創るのです。

生活者中心の時代の到来は確かだと思われませんが、生活者がその変換のイニシアティブを簡単に取れるものではありません。現在の社会は、まだまだ本音より建前が通用しているのが現実です。

そこで、生活者の本音を汲み上げ、それに基づいて生活を改善し、真の生活を実現する社会的潮流を支援する民間団体が生まれています。「NPO法人真生活創造」は、その最も代表的な団体です。

十数年前の創成期、「真生活創造」の理念や意義に、社会はなかなか関心を示しませんでした。地球環境も、人間の健康や命も大変なピンチに直面しているといっても、その重要性に注目する感性の敏感な人は、今でもそれほど多くはありません。

蛙を入れた水をゆっくりと温めていくと、蛙は問題の進行に気づかないままゆでられて死んでしまうといえます。この「ゆで蛙現象」と同じことが、現在私たち人類にも起きているのです。

自分自身のいのちの声に耳を澄まして、自分の判断で活動する生活者が増えれば、「ゆで蛙現象」の進行を防げるでしょう。

【人間が招いた危機的状況が 生命エネルギーの発見を促した】

数十年前、私は、目には見えないが、人間を含む生物や、物質の有様に深く関わっている「生命エネルギー」の存在を発見しました。

生命エネルギーは目には見えず、捉えにくいものですが、素晴らしいことに、いのち、愛、美しさなどを高める力があります。その力がいわゆるQOLの質の源です。

QOLとは、生活の質という意味です。私は、質の高い生活を「真生活」と呼んでいます。人類は、進化が進んで格が高まるにつれ、質の高い生活（真生活）を求めるようになります。

その真生活の根源が、生命エネルギーなのです。

人類は長い歴史の中で、科学や医学の研究でも、宗教や哲学の探求でも、究極的な生命エネルギーの存在を見極められず、掴めませんでした。

その生命エネルギーの発見には、皮肉な背景があります。人類は文明を構築し、人間活動を拡大した結果として、人類自身の危機的状況を招聘しています。実は、人類が招聘したその危機的状況こそが、生命エネルギーの発見を促す条件になったのです。

そのいきさつとそっくりな例があります。人間は水がなければ生きていきません。しかしその水も、充分にある時は価値をあまり認識しないで暮らしています。水が枯渇し、乾きにさいなまれるようになって初めて、水の有難さ、貴重さを実感し理解します。

生命エネルギーの発見もそれと同じで、人類がかつてない危機的状況に陥

ったからこそ、それを解消する、代えがたいものの存在が際立ち、発見できたといえます。

私たちは、たまたま運良くそうした時代に生まれ合わせ、本質的で究極的なものに気づく機会を授かったわけです。

【生命エネルギーが世界を変える】

生命エネルギーの発見によって、大自然の原理、摂理など、宇宙の全様が明快に見えてきました。おかげで真生活創造実践のための理論武装もでき、新しい思想を提唱できたのです。

私たちが今いる宇宙、この現実世界の根底にある本質は、人間が今まで考えていたようなものではなく、大自然、天から恵まれた、極めてハイレベルのものではないかと思われまます。

従来常識では測れない超越的に高いレベルのものは、発見者が創り上げるのではなく、別次元から伝達されている、与えてもらっているものだと実感しています。

生命エネルギーの存在を知った目でこの世界を見ると、今まで気づかなかった色々なことが見えてきました。

例えば、いのちの捉え方次第で、歴史観も変わってきます。私は、人間の二十世紀までの歴史を、人類前史といっています。

二十世紀までにも、いのちの大切さはある程度は認識されていました。しかし、ほとんどの人々の意識は、いのちより、お金やモノやカンバンを重視し優先していました。それでも二十世紀まで、人間社会は決定的には壊れずにいたのです。

ところが、二十一世紀以降、お金や

モノやカンバンでは、いのちのピンチを救えないという現実が際立ってきました。いのちの意義を、しっかりと体得することが重要な時期が来たのです。

いのちを中心に時代が大きく動くのが、二十一世紀です。

二十一世紀は、量より質、論理より道の時代です。別の表現をすると、人為的操作と自然現象の違いともいえます。

二十世紀までは、人為的操作でも色々なことがうまくゆきました。例えば、行政が安易に税金を増額する、必要性の低い公共投資をする、さらには戦争を起こすなどの人為的操作で、国家経済などのバランスが取りつくろわれていました。

ところが、現在はどうでしょう。税金を上げてても下げてても基本的にはどうしようもない。経済効果を出そうとして公共投資したり、あるいは止めたりしても景気には影響しないなど、人為的操作は一向に功を奏さなくなっています。

本来、自然は不平等です。人間のいのちだけが全員に平等に与えられているという考え方も間違いです。人間も野生動物と同様に生死がかかった自然淘汰の範ちゅうにあって、サバイバル状態に置かれているのです。

基本的に、いのちが不平等であることを認識すべきです。

二十世紀までは、人間だけは特別だという考えが世界の主流でした。また実際、問題が生じてても人為的に乗り越えてきました。そのため、人間の工夫、仕掛けで何でも解決できると思ひこんでいました。

そうした考え方は、西洋的世界観、自然観に基づいたものです。西洋医学も科学も人為的なものです。人間が頭を使えば何でもできるという観念が基本になっているのが、西洋思想です。

東洋思想はそうではありません。東洋では、人間も他の動物と同様、自然に生かされている、自然と融合することで人間も生かされているという世界観、自然観、価値観が伝承され、現在も生きています。

二十一世紀は、まさにその東洋的価値観が重要性を帯びてきた時代です。東洋の時代が来たといえます。有限の西洋文化に換わる無限の東洋文化の時代が来たのです。

二十一世紀以降は、人間のいのちの状態が劣化傾向にあります。それがねむりに象徴的に現れています。

二十一世紀になってから、朝起きたとき、かつてのように元気が回復していない人が増えました。

昔は特別なことがない限り、朝起きれば疲れが取れて、元気になっているのが普通でした。

しかし現在では、目覚めても疲れが残ったままの人の方が多いくらいです。子供にさえ、そんな現象が見られます。回復しない程度もどんどん大きくなっています。

一方、昔のように、朝は元気を回復して気持ちよく目覚める人も皆無ではありません。これは、いのちの状態に差があるためです。

これからますます、いのちの状態、いのちの質に差が出てきます。ほとんどの人は、このままではいのちの質が低下する一方です。

そのため、何をさし置いても人間の

いのちを高めることが、今の人類の最重要テーマになるのです。

七～八年前、文部科学省の生涯学習局が、「生きる力を育む」と題した政策を発表しました。引き続き財務省、経済産業省、厚生労働省なども「生きる力を育む」、つまり、いのちを高める教育の実施を、重要施策として挙げています。

その発想は当然のことですが、やっと当然のことをきちんと取り上げる時代が来たということです。

私は、一九九〇年とっていますが、おおざっぱには、二十世紀と二十一世紀の境目で人類の新旧の文化が交代したといえます。

いのちを高めなければ、人類は生き残れなくなったのです。いのちが最も大事という、ごく当たり前の認識を持たなくてはならないわけです。

今までのような、金、モノ、カンバンという手段中心の唯物思想は、もう通用しなくなったのです。

【太陽の電磁波が進化を促している】

今私たちが直面しているテーマは、環境改善と仲間創りだと思います。自然環境が悪化し、いのちをめぐる状況が厳しいことは、子供でも気づいています。

見えない大火事が、今地球上に発生しています。その大火事は、太陽から降り注ぐ電磁波（光）が原因で起きているので、逃げようがありません。この危険な現象には、実は、人類の進化を促す意味があります。

このところ、シックハウス症候群や、ダイオキシンの被害者などが後を絶ちません。以前より原因物質の量は減っているにも関わらず、患者さんが一向

に減らないのは、太陽光の電磁波による環境の悪化が影響しているからです。

どんな生き物も進化します。人類も質を高め、ランクを上げることが可能です。

自然や社会の環境が厳しくなっている今こそ、人間がそれに順応する力をつけ、生き残るための知恵を高め、次のレベルにステップアップする絶好の機会といえます。

適応できたものが生き延びて子孫を増やし、適応できなかったものは絶滅する。その淘汰が自然の摂理です。

人間が、地球上の生物の一員として自らの質を高められれば生き残るでしょう。しかし、そうでなければ、生き残る意味がない種として自然淘汰される運命です。

【自立介護

高齢者の枯れた知恵がぜひ必要】

日本では旧来、高齢者の介護は、家族制度の中で大変バランスよく行なわれていました。子が親を介護し、順番に世代交代しながら、家族介護を継続してきました。

ところが、核家族化の進行、社会全体の高齢化進行などで、介護する人より、される人の方が圧倒的に多くなり、旧来のような介護の形態が崩れてしまいました。そのため、介護が社会的、国家的難問になっています。

なぜ高齢者が増えたのでしょうか。それには意味と理由があるはずですが。

日本語には、西洋人には理解しがたい言葉があります。「枯れる」もそのひとつです。

「枯れた字を書く」「文章に枯れた味

がある」といった使い方をした場合、「枯れた」は、非常に質が高いことを表現しています。

高齢者は枯れた人間です。人間としての質の高さを体現しています。社会にそうした質の高い人、高齢者が増えたということは、時代が質の高い人を求めていることの現われなのです。

人間が新時代のステージ、次のステップに進むためには、高齢者が蓄積している「枯れた」知恵を活かし、人間全体の質を高める修養法を、ぜひ学ぶ必要があります。

今まで、太陽熱、風力、川の流れなどの自然エネルギーを変換し、利用してきた人間の知恵を、さらに高いレベルでより広範囲に発展させることが大事です。

つまり、介護でも、介護しながら自分の質を上げる方法や、介護を通じて自分も元気になる方法などを工夫しなければなりません。それが人間としての進化を促し、社会の進化も生むのです。

国家財政も限界に来ており、赤字国債などにこれ以上頼ることはできません。国の予算をあまり使わず、寝たきり老人を減らし、元気な人を増やすように、私たちは介護を工夫しています。自立介護といえます。

従来介護では、車椅子を使い始めた途端に、本人の足腰が弱くなっていきます。介護の環境が悪くなっている現状では、介護しながら経済的にも費用が軽減され、介護される人と共に介護する人も元気なる、というところまで考えて行なう必要があります。

介護も、保険から予防に転換しようとしています。介護予防こそ、二十一世紀の考え方「然主思想」の、生活現

場での実践であり、まさに時代が与えてくれた人類進化のステップといえます。

【量から質へ価値観を変換】

生物は常に変化し、進歩し続けます。そして、変化・進歩の限界が来たとき、進化してその壁を突破できるかどうかの試練にさらされます。

人類が生き残りをかけて、文明の限界という壁を突破するためには、進化し、文明を飛躍させて進路を変えることが必要です。

蝶がサナギから羽化して美しい成虫に変身するとき、自然は厳しさを課します。いのちを高めないと、羽化できず死んでしまいます。

人間の場合、羽化、進化を可能にする源は、生活現場での実践の積み重ねの中からは生まれません。文化も道も、生活の中から芽生え、成長し、発展します。

今までは、文化や道は経済とは別のものと考えられていました。最近関心が高まっている環境問題も含め、金がかかり、経済にとってはマイナスだとするのが常識でした。地球温暖化防止京都会議（一九九七年）で決議された京都議定書が、そうした見方の代表例です。各国の首脳などの有識者でさえ、経済の発展と環境保護は反比例するという固定概念を持っているのです。

その常識をくつがえし、文化、道、環境対策によって経済の発展を実現するためには、産業経済の三原則「エネルギー」「モノ」「情報」について、量ではなく、質を重視する価値観の変換が必要です。「文化」「道」「環境」を産業経済の発展の原動力に変換すること。それを推進するために生まれたのが、

ライフコーディネーターなのです。

今までは進歩の時代、これからは進化の時代です。

経済産業省は数年前、質の高い文化のことを感性集約産業、生活価値産業と表現しています。質を高めるとは、場のエネルギーを高めることでもあります。

これからの時代は、第三の文明ではなく、〇番目の文化を起点として始まります。文明に限界が来ているので、〇番目の文化といった方が的確でしょう。

すでに、宗教や政治だけでは世の中を変えられなくなっています。文明でも変えられません。

そこで、然主思想が東洋から世界に発信される新時代が来ると思います。この思想で、環境、生活、経済全てが完全にリセットされます。

新時代は、量から質への変換が実現される必要があります。つまり、いのち中心、本物志向です。

それを具体的に早く、広く実現するための実践方法として「真生活創造」が生まれました。その活動に参加する生活者のリーダーが、ライフコーディネーター・生活指導士です。ライフコーディネーターは、二十一世紀、生活者中心の時代に不可欠な人材です。

【ライフコーディネーターが 新時代を開く】

二十一世紀は、生活指導士・ライフコーディネーター（LC）が主役で責任者となります。そこで、LCは自身の弱点を克服し、総合的にレベルアップする必要があります。

その際、大事なことは、主体性、真

の生涯教育、心身の健康（健全な体と精神性の高い心）です。

生活指導士・LCの役目は、次の三つです。

① 真の情報の普及

情報過多で、従来のメジャーな情報は信頼性に欠けます。真実の情報を口コミで、相互信頼に基づいて普及すること。真の情報とは、五感だけに対して部分的に伝えるものではなく、体全体に臨場感を伝えるもので、それには「場」という大切な空間が必要です。

② 質の判断力

本物を見分ける力を身につける。（ブランドなどに捉われず、目に見えない質の高低や、目に見えないモノや場所の良し悪しを見極める判断力をつける）。

③ 質の手法で結果を出す

心身も家庭も社会も経済も右下がり、悪くなる一方の現状を、好転させる方向の指導や支援をすること。

以上三つの力を「真生活創造」の生涯学習で身につけた人が、二十一世紀のリーダーとしてのLCです。この人材の存在が、人類の危機を有意なチャンスに変換するのです。

私は命の源の生命エネルギーを発見し、真生活実践のリーダーのLCが台頭・活躍してこそ、全ての人間が望む安全、平和な暮らしが実現され、健全な自然が蘇ると確信しています。

二十世紀まで、人間は驕り高ぶって自己中心的な行為を重ねてきました。しかし二十一世紀は、人間中心の考え方では、人間自身が存続できない状況になっています。

人間中心の考え方を捨て、自然界全体（生物、鉱物など、自然界に存在する全てのモノ。見えるモノから、圧倒的ボリュームの目に見えないモノまで）の中で人間を位置づけ、ものごとを考える必要があります。

人類のリーダーが、そうした世界観を体得できなければ、人類は生き残れないでしょう。

つまり、人類が健全に存続するためには、自然の偉大な力を認識し、それを可能な限り取り入れ、その恩恵を十分に感受・活用するほかないのです。

人類はかつてない危機的状況に直面しています。しかし、そのような時期だからこそ、人間にとって最も大事なことが理解できるのです。

私たちは、進化せざるを得ない環境を与えてくれたことを、大自然に感謝すべきではないでしょうか。